

24時間戦えますか？

今年度も残すところ1週間の授業日となりました。この1年、中には、健康等を損なって休むこともあった生徒も教職員もそれなりにいましたが、概ね大過なく1年が過ぎようとしていることに安堵しています。生徒の皆さんはもちろんのこと、先生方も体が資本ですから、子どもたちのためにもご家族のためにも、そして何よりご自身のために常に心も体も健康であってほしいと願っています。今号は、先生方の働き方について。

<エピソード1>

我々教師も、あらかじめ予定・計画している休みを取得する場合ばかりでなく、いろいろな事情や理由があって、急に学校を休まざるを得ない場合があります。

その場合、その日の朝に、予定されていたその先生の授業を急遽他の先生に打診して別の教科の授業に振り替えてもらったり、授業の順番を入れ替えて何とかやりくりしたりするわけですが、それでもどうしてもできないときには仕方なく自習にします。

当然、生徒だけで勝手に自習させるわけにはいきませんので、その時間に授業のない先生に自習監督をお願いすることになるのです。

当校では、その自習の割り当てをする担当の先生を、校務分掌の役割として複数の先生がローテーションで担当しています。自習監督に入る先生は、予定していなかった時間に急に自習監督が入って、時と場合によっては、内心は困ったと感じる先生もいるのですが、常にお互い様という気持ちでカバーし合い事が運ばれていて特に大きな問題なく機能していると把握しています。

ところが、私の初任時の学校では、この自習監督の割り当ては初任者(1年目)の先生の役割でした。その理由はしばらくしてからわかりました。長年たいへんな生徒指導困難校で、時には授業のエスケープや授業妨害の類もある学校でしたので、自習とはいえ生徒指導がたいへんな学級に対応する時間が、自分の授業でもないのに想

定外で追加されることを正直敬遠する先生も多く、快く自習監督に入ってくれる先生ばかりではなかったのです。

「先生、自習監督お願いできますか？」と言うとあからさまに嫌な表情をする先生もいましたし、何かと理由をつけて断る先生もいたりしたのです。

つまり、一番誰もがやりたくない、嫌われ役の仕事を初任者が担当していた(担当させていた)わけです。もちろん自習監督を快く引き受けてくれる先生もいましたが、嫌な顔をされてまで引き受けてもらうくらいなら、自分が自習監督に入った方がマシだと思ったので、途中からそういう先生には初めから頼むことはしないで、私自身が自習監督に入りました。一日2時間自習監督の時もありましたし、一週間で空き時間が2、3時間という時もあった教員1年目でした。

でも決してマイナスには捉えませんでした。同僚の先生方の個々の人間性が垣間見えて、ある意味大いなる社会勉強になりました。全教員の中で一番たくさんのクラスに顔を出して、子どもたちの名前と顔が一致する人数が全校の職員の中で一番多いことをささやかな誇りに思うようにしました。そして何よりもいろんな生徒と関わられることで、教師力が磨かれると前向きに捉えました。

民間企業から教師になったばかりで、学校というのは世間の常識とはかなり乖離している場所だといろんな場面で思っていました。そしてまだ若くて生意気で一番とんがっていた頃だったので、あまりにも理不尽なこの状況に憤慨し、勇気を出して年度末の職員会議で意見をぶつけました。「どう考えてもおかしい校務分掌のあり方だ」と。

当時の教頭先生はとてもいい人でしたが、狼狽しながら、そんなつもりではないといろいろ言い訳をして理解を求めてきました。正当な自分の意見を援護射撃してくれる先生は皆無で、積極的に自分の意見を述べる先生方の雰囲気もなく、職員会議とは何のためにあるのだろうと、この事についても学校のダメなところだとあきれました。

私と教頭先生のやりとりだけで終始しましたが、結局、翌年度から複数の先生がローテーションで担当することになったのです。

最終的には私の意見が通ったことにはなりましたが、翌年度の初任者の先生は、これまでの大きな苦勞を強いられる場面もなくなり、やっぱり甘やかさないであのくらいの試練を与えるくらいの方が初

任者にとっては良かったのかなあ、などと後から思ったものです。

でも、一週間や一か月程度で教師を辞める人間が出るのも当たり前前の昨今ですから、今の時代だったら、と考えさせられます。

<エピソード2>

10年くらい前に、学校の重要な学校行事（確か授業参加？）の日に、NHKのど自慢大会に出場するからと休みをとった先生がいて、それがニュースで取り上げられ、その是非についての議論が全国的に盛り上がったことがありました。

大事な学校行事の日に、そんなプライベートのことで休みをとるとはいかななものか。いやいや、年休は労働者の権利であって、その理由が問われることはなく法的には全く問題ないはずだ、と。

年次有給休暇、特別休暇、介護休暇等々は、我々労働者に与えられている正当な権利ですので、何の後ろめたさや罪悪感をもつ必要はありません。日本は世界的に見て、このような休暇の取得率が極めて低い国だと言われてきました。今後も、休暇を取りにくい雰囲気打破していくことが社会全体でも教育現場でも必要であることは言うまでもありません。

先生方が、勤務を要する日に、「のど自慢大会」に出ようが「出張！何でも鑑定団」を観覧に行こうが、ディズニーランドに遊びに行こうが全く構わないのです。法的に正当なことです。健康上の理由や家庭の事情等で、やむを得ず長期間お休みをとることだって当然ありますし、いつか自分がそのような立場になることだってないとは限りませんから、「お互い様」なこととしてカバーするのも当然です。

法律で定められている権利を尊重し、正当な権利を行使することをとやかく言われる筋合いは全くありません。これからも心おきなく休暇を取得すべきだと考えます。

しかし一方で、場合によっては、やっぱり法律だけでは割り切れない、人としての感情が存在するのも現実だと思います。

私ごとながら、私が若い頃と同僚だった50歳代半ばの先生は、決まって飲み会の翌日は必ず年休でした。しかも、休むという電話連絡は、彼自身でなく彼の娘さんから来るのです。「アルコールはほどほどにすればいいのに。せめて自分で連絡したら」とあきれました。部活動のガイドラインがなかった時分、土日の休日2日間終日部活動をして、次の月曜日に毎度毎度必ず年休をとる先生もいました。

「確かに生徒のために休みなくなのはわかりますが、部活は二の次でしょ。生徒がどんなに頑張っても、そんな顧問の部活を誰も応援しないと思うけど」と、正直、その先生方の代わりに何時間も自習監督に出た私は思っていました。

<エピソード1>での自習監督を嫌がっていた先生を軽蔑する気はありません。あの時の学校のたいへんな状況だったら仕方のないことだと理解はできます。

お休みをとるのは正当な権利だと私も思いますし、その代わりに自分が自習に何時間入ろうと私は全く問題ありません。ただ、たった一言だけは欲しいなと思うのです。「昨日はありがとね」と。それですべてが救われるのです。それが疎かになっている今の世の中の風潮こそが心配です。

30年以上も前のバブル全盛時代、ある製薬会社の栄養ドリンク剤のテレビCMソングに出てくるキャッチコピーの歌詞が「24時間戦えますか」というもので、その年の流行語にもなりました。イケイケドンドンの時代を反映し、企業戦士を讃えるかのような意味と捉える人が多かったようですが、当の製薬会社は、「オンとオフを使い分けてがんばろう」という意味だと説明（釈明？）していました。いずれにせよ、もちろん今の時代では到底受け入れられないメッセージです。

5年前のお盆に、長野県信州湯田中温泉に夫婦で旅行に出かけました。ネットで適当に予約したのが江戸時代創業の老舗の大きな旅館。夕食後温泉街を散策していると、温泉街の中心でお祭りがあってカラオケ大会が始まろうとしていました。自分も飛び入りで参加したら、約40組の出場者の中で、多くの地元民を差し置いて私が優勝をかつさらってしまったのです。副賞は、温泉旅館のペア無料宿泊券。見ると、その日泊っている旅館が提供したもので、数か月後再びその旅館を訪れることになりました。おまけに、あとから、その主人は、私の大学時代に在籍していたクラブの10年ほど上の先輩だとわかってさらに驚きました。（湯田中温泉「よろずや」という旅館です。すばらしい旅館です。ぜひご利用ください）。

因みに、その時取得したのは「夏季休暇」。5日を超えない範囲内で必要と認められている特別休暇。これが私の「のど自慢」「休み自慢」物語です。